

高校生における「こころの中の風景」が 心理臨床の場で果たす役割—原風景と心象風景—

寺本陽子¹ 山本真由美²

The Role of Clinical Psychological Effects of “the View Imagined
in Our Mind” in the Case of Senior High School Students :
the scene imprinted on our memory and the vision of mental image

Yohko TERAMOTO Mayumi YAMAMOTO

Department of Psychology, The University of Tokushima

Abstract

How the view imagined in our mind is shaped?

The aim of this paper was to explain the structure of the view imagined in our mind which senior high school students entertain, in order to get a clue to the clinical intervention of psychological problem.

We approached to the aim by way of free composition, structured questionnaire and feeling differential method.

The result was that the view imagined in our mind consists of “ the scene imprinted on our memory ” and “ the vision of mental image ”. The former, equivalent to E. Husserl's “ Lebenswelt ”, is part of autobiographical memory that is subjective constructed. The latter reflects their own anxiety and depression, and lacks memories of positive experiences.

Our discussion was centered on the personality of young people. In this period of time their personalities are in the developing process, where the view imagined in their mind is often influenced directly by their inner anxiety.

We concluded that narrative approach in dealing with the view imagined in our mind, gives a useful means for self-examination especially in the case of young people.

【Key Words】 the view imagined in our mind, the scene imprinted on our memory, the vision of mental image, senior high school students

*1 徳島大学大学院人間・自然環境研究科臨床心理相談室 Clinical Psychology Counseling Service at Graduate School of Human and Nature Environment Sciences, The University of Tokushima

*2 徳島大学総合科学部 Faculty of Intergrated Arts and Sciences, The University of Tokushima

第1章：問題の所在と研究の目的

青年心理学の礎を築いたとされる Hall は、青年期を「第二の誕生—疾風怒濤の時代」と位置づけた。

Spranger (1924/1973)によると、8～12歳の子どもは、子ども世界の範疇において、自分自身を知り、それに満足している。ところが、児童期を脱して目が内界に向き始めると、子どもなりにできあがっていた平衡状態が破れ、内部から心的生活の展開が湧き起こってくる。青年期は、「自分とは何か」を問い、自己や親との葛藤・不安に悩みつつ、社会的に自立した存在へ成長するという意味で、まさしく「第二の誕生」と呼ぶのにふさわしい。

また、青年期は、Piaget の言う形式的操作の段階に入り、それによって、自己認知能力や自己への気づきが高まってくる。こうして、現在だけではなく、過去・現在・未来という時間的連続性を認識しながら、過去を現在と結びつけて整理し、実現可能な将来を展望できるようになる。

とりわけ、高校生は、差しせまった進路選択とも相まって、自らを振り返り、将来をも視野に入れながら、自分らしく生きる道を模索して行かねばならない。したがって、高校時代は「内面的世界の獲得、発見と展開の時期」（久世，2000）と説明されるように、新しい自己の発見と自我の形成へ主体的に取り組むことが、大きな発達課題だと考えられる。

自己との出会いを求めて、自分の内面を見つめるときに浮かび上がってくるのが、「こころの中の風景」ではないだろうか。

文化人類学者の岩田（1979）は、「そこに不思議の場所がある。眼を閉じておのれの内部を凝視すると、そこに淡い灰色の空間がひろがっているのを感じず、その空間の背後に、不思議な場所があるように思われるのである。不用意にそこに近づいてそれを見ようとすると、その場所は急ぎ足に遠ざかってしまう。しかし、おのれを忘れ、その場所の存在をも忘れていて、それが意外に近いところにやってきて何事かを告げる。そういう不思議の場所が、…〈中略〉… われわれにとってもっとも根源的な創造の場なのではないか」と述べている。東南アジアにおける広汎なフィールドワークの体験に立脚しつつ、アニミズム・民俗学・仏教などのさまざまな視点から、「不思議の場所」に接近しようと試みた岩田の論考は、深い洞察に満ち、多くの示唆を私たちに与えてくれる。岩田の言う「不思議の場所」は、「こころの中の風景」と言えるかもしれない。

長年、高等学校教育に携わってきた筆者の1人（寺本）は、高校生に岩田の文章を呈示し、「こころの中の風景」と題する作文を書いてもらったことがある¹。その際、生徒たちによって綴られた「こころの中の風景」は、大きく2つに分けられるのではないかという印象を受けた。

1つは、小さいころのできごとや忘れられない風景が、回顧的に描かれたものである。このような作文には、先行研究で指摘された原風景的特徴、すなわち、①ミクロコスモスとしてのふるさとが描かれ、その象徴である小さな生き物が登場すること、②背景に山々

1 1982年2月A県の私立B高等学校、2003年7月C県の県立D高等学校において、それぞれ2年生の生徒を対象に実施した。

のパノラマ風景や海などの遠望された自然が広がっていること、③前景（柄）の小さな生き物と背景（地）を1つの風景に結びつける、驚き・怖れ・神秘感・不思議・衝撃などが存在すること、が顕著であった。

もう1つは、幼少年期の思い出やステレオタイプ化されたふるさとイメージ²に限定されない、曖昧模糊とした心象風景である。このような特徴を帯びた作文も、少なからぬ数にのぼり、そこには、高校生の抱えている不安・迷いなどが色濃く投影されているように思われた。

原風景は、『造園用語辞典』（1985）によると、「風土・気候・人間・歴史などが醸し出す原イメージや方言・習慣・体験などを含んだ原体験に、自分自身の内面、すなわち内なる風景が一体になった個人的所産」と定義されている。したがって、原風景とは、記憶の一齣、つまり、原体験を核として含み、それを支えるフィールド全体が描かれた1枚の「風景画」と言ってもよいだろう。

とりわけ、作家たちは、それぞれ固有の原風景を心に抱き、はるかに眺めた幼い日々の記憶の断片を、繰り返し作品に表現してきた。薄明の彼方から浮かび上がる原風景は、作家の自己形成空間である故郷の風土と、密接にかかわり合っている。

文学におけるこのような原風景に注目したのが、文芸評論家の奥野（1972）であった。創作行為とは、何らかの意味で自己を語ることであるが、奥野は、無意識の内に形成された作家の原風景が、深層意識からその文学を決定していると考え、作品に投影された原風景を探り出すことにより、作家の本質とその文学を真に理解できると述べている。すなわち、原風景は、「その作家にとって文学の母胎であり、母なる大地である。彼の文学を根底から支えているもので……〈中略〉……自分自身にほかならない」。奥野の論考は、原風景に関する最初の本格的な分析であり、文学界に原風景という言葉を定着させ、また、その後の原風景研究に大きな影響をおよぼした。

原風景については、1970年代以降、文学のみならず、文化人類学・人文地理学・心理学など、多方面からの研究が蓄積されている³。

上述のような原風景に対して、「こころの中の風景」は、漠としてつかみどころのない言葉であり、しばしば原風景と混同されがちであった。しかし、筆者らは、原風景に関する先行研究の知見、および、「こころの中の風景」と題する作文を高校生に書いてもらった経験にもとづき、「こころの中の風景」は、原風景と心象風景に分けられるのではないかと考える。

2 「原風景」と「ふるさと」は類似したことばであるが、関根（1982）は、その違いについて、次のように述べている。『「ふるさと」というとき、まずはじめに具体的な地域像が前面に出てくるが、『原風景』ではあくまで心的世界の中のイメージとしての風景をさぐるのである。結果として触れあう点は大いにあるが、構え方は異なる」。

3 文学では高橋（1978）など、文化人類学では岩田（1977・1979・1982・1985・1992）、関根（1982）など、人文地理学では寺本潔（1985・1986・1988・1990）など、心理学では星野・長谷川（1985）、井上（1995）、呉（2000・2001）などの研究がある。

すなわち、原風景は、おおむね幼少年期に形成され、原体験⁴とでも言うべき思い出が、「豊かな自然との交歓」(関根, 1982)を背景とし、具体的に記述されている。原風景は、「1人ひとりの記憶の中に組み立てられたコスモス⁵」(岩田, 1979)・「私という全存在の表現」(関根, 1982)であり、簡単に大きく変化するものではない。

それに対し、心象風景とは、具体的な体験にもとづいた記憶ではなく、形成時期も不明であるか、ごく最近である。現在の自分の心を無意識的に反映した深層のイメージであり、何らかのきっかけで、容易に変化しうるものである。

本研究では、高校生を対象として、「こころの中の風景」に関する上記の仮説を検証し、原風景と心象風景が持つそれぞれの特徴を比較・考察する。さらに、心理臨床の場において、「こころの中の風景」を見つめることがどのような意味を持つのか、また、原風景と心象風景がどのような役割を果たせるのか、その可能性を考える端緒としたい。

第2章：研究の方法

C 県の県立 D 高等学校における予備的な調査 (2003年7月実施) の結果にもとづいて、2004年2月、A 県の私立 E 高等学校と C 県の県立 D 高等学校に在籍する高校2年生を対象とし、「こころの中の風景」と題する作文とそれに付随する構造化された質問紙調査をおこなった。ともに無記名である。

作文 (縦置きで横書き21行の A4版用紙1枚) は、「不思議の場所」に関する岩田 (1979) の文章を読んだ上、箇条書きではなく、物語風に (その光景が目浮かぶように)、各人の「こころの中の風景」を書いてもらった。

質問紙の内容は、自由記述された上記の作文に関する構成的質問、および、感情微分法を中心とした。質問項目の作成に当たり、主として星野・長谷川 (1985)、井上 (1995) を参考にした。原風景を感情の次元からとらえようとする場合、感情微分法はきわめて有効な心理技法であることが、星野・長谷川 (1985) により明らかにされている。

なお、回収率は89.9%、有効回答数は152、有効回答における調査対象者の内訳は表1の通りである。

表1 調査対象者の内訳

	E 高等学校	D 高等学校	合計
男子	0名	34名	34名 (22.4%)
女子	70名	48名	118名 (77.6%)
合計	70名 (46.1%)	82名 (53.9%)	152名 (100.0%)

4 原体験について、関根 (1982) は、「原風景は原体験と離れがたいものではあるが、…〈中略〉…『経験化』されたものないしされつつあるものが原風景ではないか」と述べている。

5 コスモス (宇宙) とは、ドイツ近代地理学の祖と言われる Humboldt が考えた世界観。岩田 (1976) は「それ自身の内的秩序を保ち、美的調和をたもっている生きた全体としての宇宙、あるいはわれわれ人類のすみかであり、天と地をふくむこの世界」と説明している。

第3章：結果

〈第1節〉「こころの中の風景」の分類

まず、作文を、その内容から、A. 原風景 B. 心象風景 C. その他⁶ の3つに分類した。分類は、3名の評定者（うち1名は寺本）が独立しておこなった。なお、類型の一致率は、72.4%である。評定が異なる場合は、評定者間で協議をし、最終的な分類を決定した。

その結果は、表2の通りである。原風景と心象風景の比率は、ほぼ2：1であった。

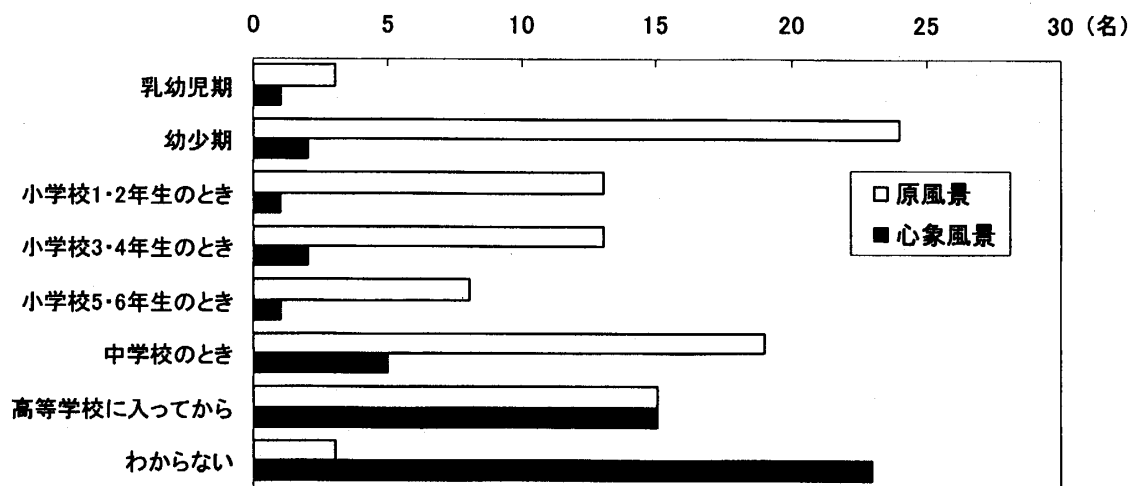
表2 作文の分類

	A. 原風景	B. 心象風景	C. その他	合計
男子	18名	16名	0名	34名
女子	81名	35名	2名	118名
合計	99名 (65.1%)	51名 (33.6%)	2名 (1.3%)	152名 (100.0%)

〈第2節〉原風景と心象風景の比較

(1) 「こころの中の風景」の形成時期

「こころの中の風景」は、いつごろの体験を中心に形成されているのだろうか。



注) 乳幼児期は3歳以前、幼少期は4歳～小学校入学をさす (n=150)

図1 「こころの中の風景」の形成時期

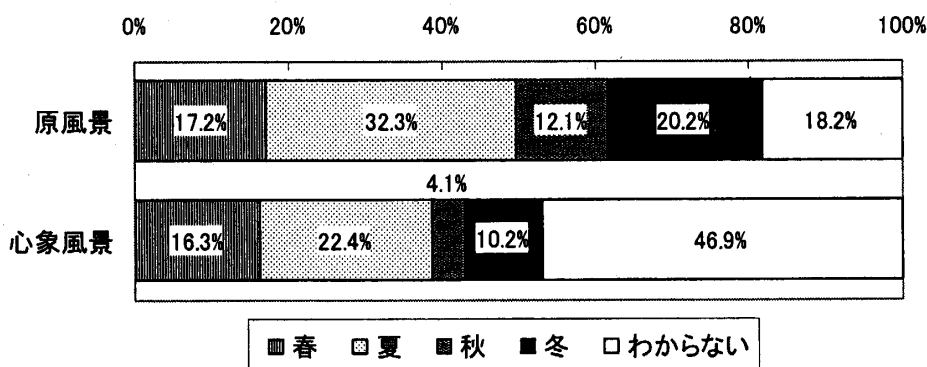
6 あまりにも文章が短く、判定が不可能な作文を「その他」と分類した。なお、書かれた作文の平均分量（行数）は、原風景・心象風景を問わず、いずれも8.8行である。

図1によると、原風景の場合、もっとも多かったのは「幼少期」であった。「乳幼児期」・「小学校1・2年生のとき」・「小学校3・4年生のとき」・「小学校5・6年生のとき」を合わせると、全体の61.6%が小学校時代までに原風景の記憶を形成していることになる。

一方、心象風景の方は、「わからない」がもっとも多い。2番目に多い「高等学校に入ってから」を合わせると、心象風景全体の76.0%に達していた。

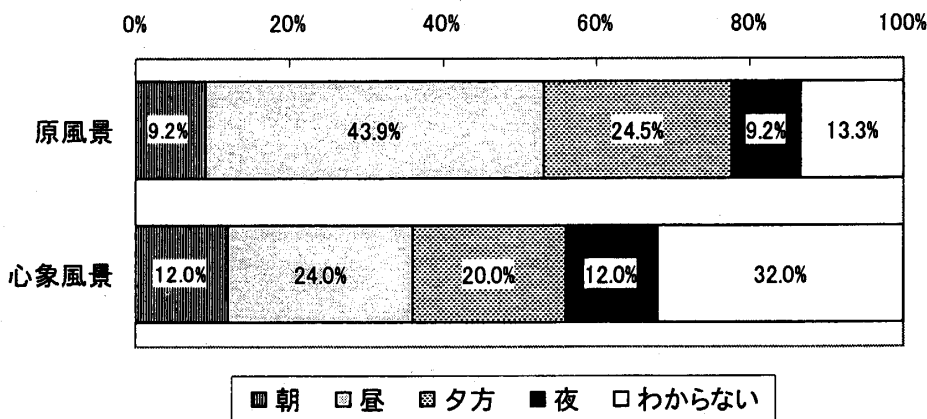
(2) 「こころの中の風景」にあらわれた季節と時間帯

作文に描かれた季節と時間帯の結果は、それぞれ図2・図3の通りである。



注) 四捨五入の結果、構成比の合計は100%に一致しないことがある (n=149)

図2 「こころの中の風景」にあらわれた季節



注) 四捨五入の結果、構成比の合計は100%に一致しないことがある (n=148)

図3 「こころの中の風景」にあらわれた時間帯

原風景に多く描かれた季節は夏、時間帯は昼であり、夏32.3%・昼43.9%という数字は、井上(1985)の調査における夏34.6%、昼44.1%という結果とほぼ同様であった。夏の日中が多く描かれることについて、井上(1985)は、「子供達の生活における自由時間の存

在が、原風景の形成と密接に関連している」と述べている。

心象風景も、おおむね同じ傾向を持ちながら、数としては、季節・時間帯ともに「わからない」が最多であった。季節で46.9%、時間帯で32.0%という「わからない」の回答数には、心象風景の無季節性・無時間性がはっきりと示されている。

(3) 「こころの中の風景」にあらわれた場所

表3を見ると、「こころの中の風景」にあらわれた場所は、原風景の場合、「自宅、または、自宅の近く」が約1/3を占め、「学校（保育園・幼稚園・小学校・中学校・高等学校）」と「旅行先」が、それに続いた。「旅行先」と答えている高校生の作文には、家族旅行や修学旅行、クラブ活動などの合宿・遠征の思い出が描かれていた。これら3つを合わせると、約7割に達する。このように、原風景の形成には、家族や学校のかかわっている場所が大きな意味を持っていた。

他方、心象風景では、「わからない」「その他」と答えた生徒が、合わせて64.7%に達していた。

表3 「こころの中の風景」にあらわれた場所

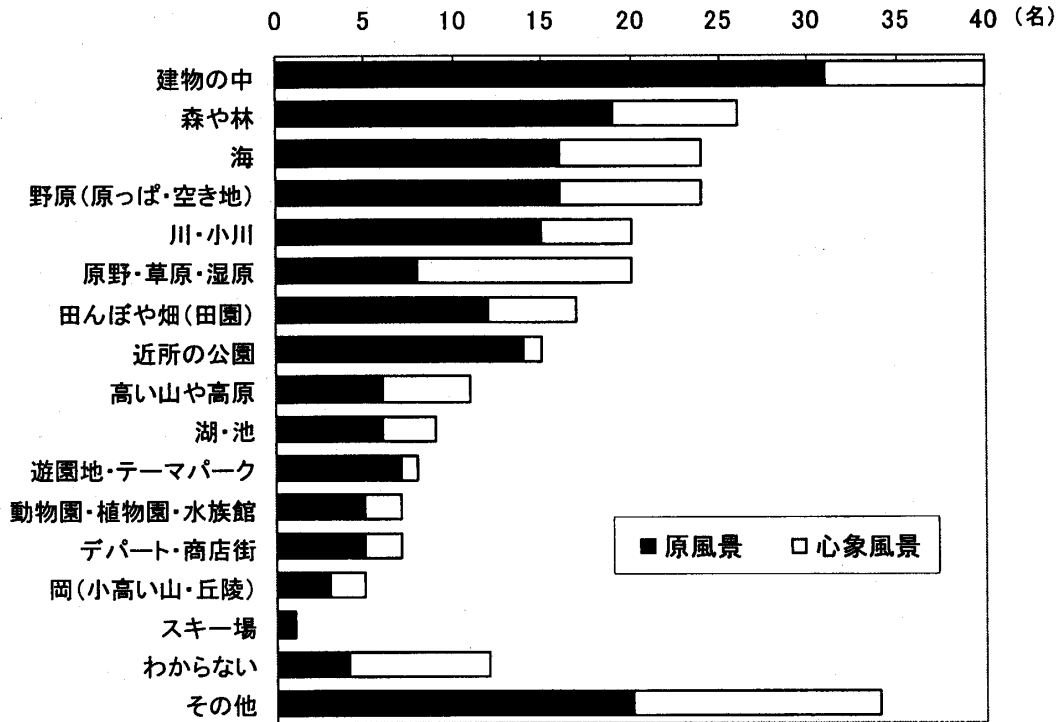
	原 風 景	心 象 風 景
自宅、または、自宅の近く	31(31.3%)	6(11.8%)
友人の家の近く	1(1.0%)	0(0.0%)
祖父母の家の近く	4(4.0%)	1(2.0%)
学校(保育園・幼稚園・小学校・中学校・高等学校)	19(19.2%)	4(7.8%)
通学(通園)の途中	6(6.1%)	2(3.9%)
旅行先	19(19.2%)	4(7.8%)
わからない	5(5.1%)	21(41.2%)
その他	14(14.1%)	12(23.5%)
無回答	0(0.0%)	1(2.0%)
合 計	99(100.0%)	51(100.0%)

(n=150)

(4) 「こころの中の風景」を取り巻く環境

図4によると、原風景では、「建物の中」が突出して多い。しかし、「森や林」「海」「野原(原っぱ・空き地)」「川・小川」「原野・草原・湿原」「田んぼや畑(田園)」「高い山や高原」「湖・池」「岡(小高い山・丘陵)」を合わせると、原風景全体の53.7%を占め、豊かな自然も背景になっていることがわかる。

他方、心象風景では、「わからない」と「その他」が、合わせて約1/4になった。



[複数回答]

図4 「こころの中の風景」を取りまく環境

(5) 「こころの中の風景」にあらわれたサウンドスケープ

近年、風景をめぐる環境の中で注目を集めているのが、周囲にあるすべての音を意味するサウンドスケープ(音環境)である。この概念は、カナダ生まれの作曲家 Schafer, R. M. によって明確化された(山岸, 1999)。

「こころの中の風景」は、どのようなサウンドスケープを背景としているのだろうか。表4は、高校生に書いてもらった作文から、音に関する記述を抜き出し、まとめたものである。

原風景では、「人の声」(自分の声、母をはじめとする家族の声、友だち・先生・近所の人などの声)が、原風景の作文に記述された音の約3/4を占めた。また、原風景における「人の声」には、自分の泣き声も多く含まれている。自分の泣き声は、悲しさのためであったり、わけのわからない恐怖感のためであったり、さびしさのためであったり、さまざまな理由に起因する。

それに対し、心象風景では、「人工音」がもっとも多く、「その他」(「イライラするほどのうるさい音」・「不愉快な音」・「声のようなもの[あ・う・わ]のように、言葉として理解できない)」などを合わせると、心象風景の作文に記述された音のちょうど半分になった。「人工音」とは、「金属音」・「時計のカチカチと時を刻む音」・「テレビの音」・「録音テープの回っている音」などである。また、「何も聞こえない」・「音がしない」という無音状態や「静まり返った」・「とても静か」という静けさをあらわす記述も、7名の作文に登場した。

表4 「こころの中の風景」にあらわれたサウンドスケープ

	原風景	心象風景
人の声	46(74.2%)	6(25.0%)
自然音	8(12.9%)	6(25.0%)
人工音	8(12.9%)	9(37.5%)
その他	0(0.0%)	3(12.5%)
合計	62(100.0%)	24(100.0%)

(6) 「こころの中の風景」が持つ意味と機能

「こころの中の風景」は、それを想起した人々にとって、どのような意味を持ち、いかなる機能を果たしているのだろうか。

表5から、原風景の意味や機能として、高校生が認識している項目を高い順に並べると、「なつかしくたいせつな風景」・「生き方に影響をおよぼしている」・「安らぎを与えてくれる」であった。また、心象風景では、「安らぎを与えてくれる」・「創造力の源泉」・「生き方に影響をおよぼしている」という順番になった。

なお、t検定の結果、「『ふるさと』の風景」・「なつかしくたいせつな風景」(t=3.52, df=124, P<.01; t=5.23, df=90, P<.01)は、原風景の方が有意に高く、「創造力の源泉」(t=3.49, df=103, P<.01)は、心象風景の方が有意に高かった。

表5 「こころの中の風景」が持つ意味と機能

	原風景	心象風景	全体	t検定
「ふるさと」の風景	2.72	1.86	2.43	**
なつかしくたいせつな風景	3.99	2.61	3.52	**
悲しいがたいせつな風景	2.40	2.27	2.36	
安らぎを与えてくれる	3.19	3.22	3.20	
生きる力や希望を与えてくれる	2.99	2.84	2.94	
生き方に影響をおよぼしている	3.23	3.06	3.17	
自分らしさの原点	2.76	2.71	2.74	
創造力の源泉	2.32	3.08	2.58	**
たいした意味はない	2.14	2.43	2.24	
できることなら忘れた風景	1.67	2.02	1.79	
回答数	99	51	150	

** p < .01

(7) 「こころの中の風景」を想起するとき

表6は、「こころの中の風景」をどのような状況で想起することが多いのか、11の状況を設定し、質問した結果である。

原風景の場合、想起する頻度の高い状況を順番に見ると、「幼い頃の話が出たとき」・「ぼけっとしているとき」・「一人のとき」であった。また、心象風景では、「一人のとき」・「ぼ

けっとしているとき」・「孤独感や空虚感を感じたとき」という順番になった。

なお、t-検定の結果、「故郷の話をしたとき」・「家族団らんのとき」・「幼い頃の話が出たとき」($t=3.35$, $df=124$, $P<.01$; $t=5.59$, $df=148$, $P<.01$; $t=7.08$, $df=124$, $P<.01$) は、原風景の方が有意に高く、「一人のとき」($t=3.51$, $df=130$, $P<.01$) は、心象風景の方が有意に高かった。

表6 「こころの中の風景」を想起するとき

	原風景	心象風景	全体	t-検定
ぼけっとしているとき	3.40	3.37	3.39	
日常生活に疲れたとき	2.48	2.73	2.57	
自信を失ったとき	2.51	2.94	2.65	
故郷の話をしたとき	2.72	1.90	2.44	**
孤独感や空虚感を感じたとき	2.88	3.33	3.03	
楽しいとき	2.37	1.96	2.23	
旅行したとき	2.28	1.88	2.15	
友人と話しているとき	2.42	2.00	2.28	
家族団らんのとき	2.44	1.47	2.11	**
一人のとき	3.38	4.10	3.63	**
幼い頃の話が出たとき	3.60	1.96	3.04	**
回答数	99	51	150	

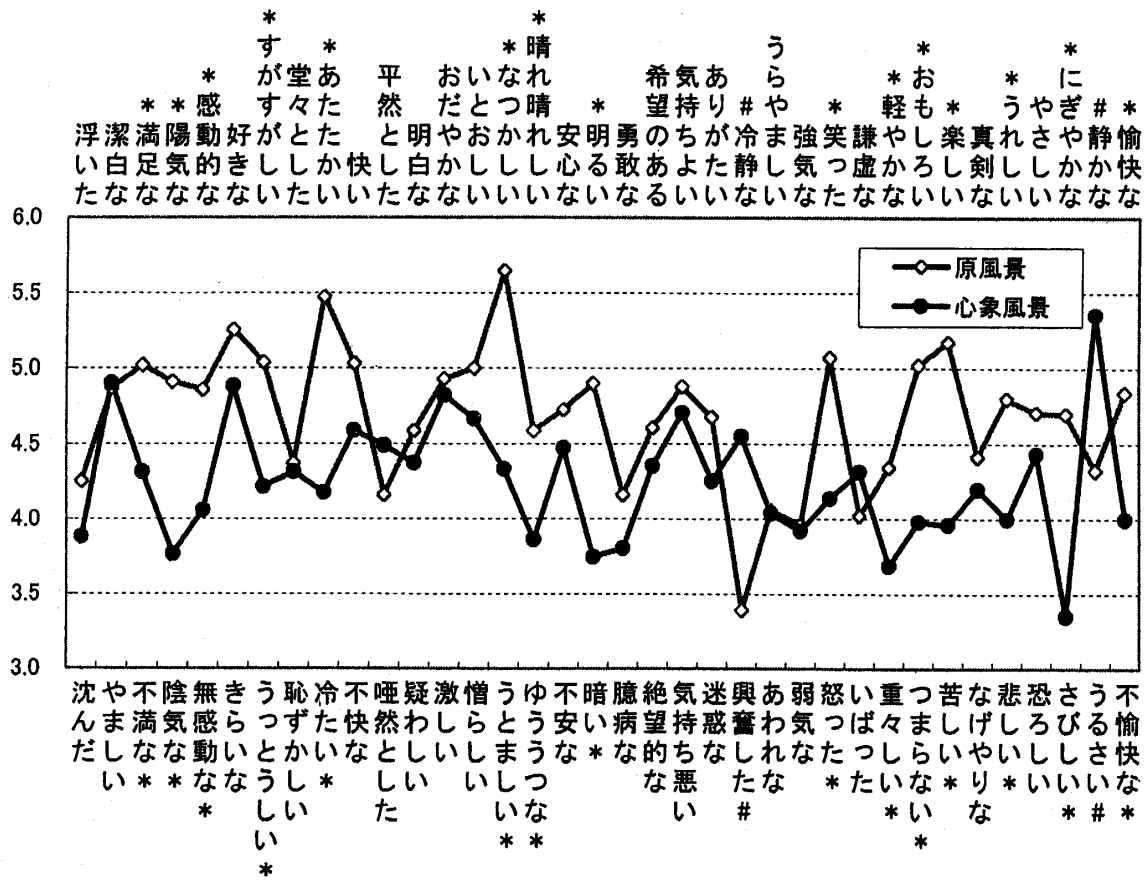
** $p < .01$

(8) 「こころの中の風景」の想起にともなう感情

「こころの中の風景」の想起にともなう感情体験をとらえるため、星野・長谷川(1985)による感情微分法を用い、分析をおこなった。尺度得点をプロフィール化したものが、図5である。

t-検定の結果、「満足な-不満な」・「陽気な-陰気な」・「感動的な-無感動な」・「すがすがしい-うっとうしい」・「あたたかい-冷たい」・「なつかしい-うとましい」・「晴れ晴れしい-ゆううつな」・「明るい-暗い」・「笑った-怒った」・「軽やかな-重々しい」・「おもしろい-つまらない」・「楽しい-苦しい」・「うれしい-悲しい」・「にぎやかな-さびしい」・「愉快的な-不愉快的な」($t=2.51$, $df=113$, $P<.05$; $t=4.21$, $df=117$, $P<.01$; $t=2.79$, $df=99$, $P<.01$; $t=2.71$, $df=82$, $P<.01$; $t=4.04$, $df=87$, $P<.01$; $t=4.94$, $df=105$, $P<.01$; $t=2.45$, $df=93$, $P<.05$; $t=3.54$, $df=93$, $P<.01$; $t=4.48$, $df=128$, $P<.01$; $t=2.40$, $df=79$, $P<.05$; $t=4.55$, $df=103$, $P<.01$; $t=4.18$, $df=110$, $P<.01$; $t=2.87$, $df=127$, $P<.01$; $t=4.77$, $df=113$, $P<.01$; $t=3.46$, $df=124$, $P<.01$) は、原風景の方が有意に高く、「冷静な-興奮した」・「静かな-うるさい」($t=4.56$, $df=91$, $P<.01$; $t=3.78$, $df=88$, $P<.01$) は、心象風景の方が有意に高かった。

「冷静な-興奮した」についても、星野・長谷川(1985)と同様、「興奮した」を「心躍る」・「感動する」という文脈で解釈するならば、原風景を想起するときの感情は、全体としてポジティブなものだと言えよう。また、心象風景を想起するときの感情は、当然ながら、全体としてネガティブなものであった。



*は原風景の方が有意に高く、#は心象風景の方が有意に高い (n = 150)

図5 「こころの中の風景」の想起にともなう感情

第4章：考察

〈第1節〉原風景と心象風景における特徴の比較

以上見てきた原風景と心象風景の特徴をまとめると、表7のようになる。

原風景は、多くの先行研究で指摘されたように、幼少年期における記憶（子ども時代の思い出）を中心に形成されている。井上（1995）は、幼少年期のさまざまな体験が原風景になりやすい理由として、①「遊びの中で風景を刻む子供達の、無心で熱心な自我参与は心に深い刻印をつくる」こと、②「幼少年期の体験の多くは、素直な意識下のもとで自分の体で直接確認できた世界での感動体験を中核にして形成されていること」、③「認知構造が大人に比べ余り強固でないため、たとえそれが大人から見て論理的に矛盾した世界であっても、自己の中に受け入れやすいこと」、④「風景を対象化しイメージとして成立させるには、ある程度の時間経過が必要」であること、をあげている。その結果、「深層意

表7 原風景と心象風景の特徴

	原 風 景	心 象 風 景
形成時期	小学生時代まで	はっきりしない
あらわれた季節	夏	はっきりしない
あらわれた時間帯	昼	はっきりしない
あらわれた場所	家族や学校のかかわっている場所	はっきりしない
取り巻く環境	建物の中が中心だが、背景としての豊かな自然が存在する	はっきりしない
サウンドスケープ	人の声や繊細で感性に響く印象的な自然音	無機的で不快な人工音や無音状態 (どちらかと言えば、ネガティブなイメージの静けさ)
意味・機能	<u>なつかしくたいせつな風景(思い出)</u> で、自分の生き方に影響をおよぼし、安らぎを与えてくれる	創造力の源泉で、自分の生き方に影響をおよぼし、安らぎを与えてくれる
想起するとき	家族や友人との会話を通して、幼い日々や故郷の思い出を回顧したとき	ひとりぼっちで、孤独感や空虚感を強く感じたとき
想起にともなう感情	ポジティブな感情	ネガティブな感情
全体的特徴	<ul style="list-style-type: none"> * 主観的に再構成された自伝的記憶の1つ * 「生活世界 (Lebenswelt)」の風景 * 家族・学校・地域における親密な人間関係が反映されている * 青年期全体を通じ、あまり変化しない 	<ul style="list-style-type: none"> * 核になる原体験を持たない * 自分が抱えている現在の不安や迷いを無意識的に反映した深層のイメージ * 時空を越えた超現実の感覚的・詩的な世界のイメージ

識の中に固着」(奥野, 1972)した幼少年期の原体験は、輪郭の定まらない断片的な記憶ながら、忘れがたい存在の構図を形作り、原風景になりえるのではないかと推察される。

このように、原風景は、自らの体験や思い出が投影された記憶像の一部であり、明確な形成時期・季節・時間帯を持つ。その意味で、原風景は、主観的に再構成された自伝的記憶の1つであり、Husserlの言う「生活世界 (Lebenswelt) ⁷」の風景であると考えられよう。

「生活世界 (Lebenswelt)」には、目からスタートする生活の地平ばかりでなく、耳からスタートする生活の地平も含まれる。すなわち、「生活世界 (Lebenswelt)」は、「さまざまな音によって意味づけられたり、ドラマ化されたりする」(山岸, 1999)のものであり、

7 千田 (1981) は、「生活世界 (Lebenswelt)」について、「具体的経験の中で与えられる世界」であると述べている。すなわち、Marx (1987/1994) が、「既に生きている世界」・「<生成してきた>世界」と説明しているように、私たちの直接的な体験を基盤とする周囲の環境と言えるだろう。

多くの小説や紀行文の中でも、音は、きわめて印象的な体験として描写されている⁸。

原風景が描かれた作文においても、「さわやかでひんやりとした夏の微風にそよいで、かすかに鳴る風鈴の音色」・「夕方になって、ツクツクボウシの声が一斉に聞こえてきた」・「畳敷きの広い居間で昼寝をしている家族の寝息」・「サラサラと聞こえる木々の葉ずれ」など、繊細で感性に響く印象的な音が多かった。これらの文では、静謐な時の流れを破る一瞬の変化が鮮やかに切り取られ、岩田（1979）が原風景の特徴としてあげた「（柄と地を）1つの風景にむすびつけている怖れ、驚き、不思議、あるいは衝撃の存在」も感じられる。

また、原風景では、こうした自然音の感覚体験と共に、家族・友だち・先生・近所の人など、身近にいる人の声や自分の声も多く登場していた。①家族や友人との会話を通して、幼い日々や故郷の思い出を回顧したときに想起されること、②家族や学校のかかわっている場所が、「特別の場所⁹」として大きな意味を持っていること、という質問紙調査の結果も合わせると、原風景には、家族・学校・地域における親密な人間関係が反映されているように思われる。

なお、既往の研究で指摘された原風景の特徴に関しては、おおむね、本調査においても合致した。先行研究における調査対象者の大部分は、短大生・大学生である。したがって、高校生・短大生・大学生の原風景は、ほぼ同様の特徴を有することになり、青年期の原風景は、その前期・中期・後期において、とりたてて大きな違いはないと言える。

一方、心象風景は、形成時期・季節・時間帯・場所・取り巻く環境のいずれもが、はっきりしない。

ところが、「こころの中の風景」にあらわれた場所と「こころの中の風景」を取り巻く環境について、「その他」と回答した場合の自由記述からは、以下のような興味深い回答が見られた。すなわち、場所では、「よくわからない空間」・「現実にはなさそう」・「多分私の世界だと思う」・「宇宙のようにたくさんのカラフルな小さな星のある所」、また、取り巻く環境では、「柔らかい場所と冷たい場所」・「まっ白な風景」・「静かな時間」・「ミヒヤエル・エンデの『モモ』を読んだ途中の感じ」などである。

以上のことから、心象風景は、核になる原体験を持たず、時空を越えた超現実の感性的・詩的な世界のイメージとも考えられる。心象風景の意味や機能として、「安らぎを与えてくれる」と認識している項目が高くなったのは、このような空想の世界が、自分にとっての安全な避難場所になっているためではなかろうか。

8 たとえば、明治11年に、単身、日本を訪れた Bird（1880/1973）も、「合わせて400の下駄の音は、私にとって初めて聞く音であった。…〈中略〉…入口に住んでいる何百という鳩は、頭上を飛来し、そのバタバタという羽根の音が、鈴の音や太鼓、どらの音とまじり、僧侶の読経の高声や、低くつぶやきながら祈る人々の声、娘たちの笑いさざめく声、男たちのかん高い話し声がまじりあって、あたり一面が騒音にうずまいている」と浅草の印象を記している。

9 Buttimer（1976）によると、「生活世界（Lebenswelt）」は、部屋・家・近隣・地域・国家という同心円状の層によって取り囲まれているが、それに加え、「特別の場所」（生誕地・初恋の地など、他とは質的に異なっている場所）が存在する。原風景に描かれている場所も、Buttimer の言う「特別の場所」に該当するのではないだろうか。

しかし、心象風景が描かれた作文には、「人に見られている感じ」・「道も数本あるが、怖くて行きたくなくなってしまう」・「不安で進みたくない」・「灰色か、黒か、紫な感じ」・「霧がかかったような感じ」・「多少光が射したと思えば、すぐ、真っ暗になる」というような表現が、随所に見受けられた。西村（1992）は、高校時代を「不安と恐れが多い時期」だとしているが、先の表現からは、現在、自分が抱えている不安や迷いが反映している様子もうかがわれる。

このことは、心象風景のサウンドスケープからも、傍証される。心象風景のサウンドスケープを特徴づけるのは、無機的で不快な音や無音状態、どちらかと言えばネガティブなイメージの静けさである。大多数の人々は、静けさを、落ち着きや安らぎの源であると感じるが、その一方で、静けさを苦手とする人々も存在する。そういう人々にとって、静けさとは、恐怖・孤独感・緊張感を強えられるサウンドスケープにほかならない。作文に描かれた心象風景に漂っている静けさは、そうした内面感情のあらわれとも考えられる。

質問紙調査の結果からは、作文に心象風景を描いた高校生の方が、家族や友人とのかかわりがうすく、したがって、幼い頃の話をする機会も少ない様子が垣間見えた。心象風景は、ひとりぼっちの高校生が孤独感や空虚感を強く感じたときに想起しやすく、時には、それが逃避の場となっているとも言えるだろう。

なお、奥野（1972）により、原風景の機能として高く評価された「創造力の源泉」が、原風景よりも心象風景で有意に高くなっているのは、なぜだろうか。井上（1995）も、「（創造力の原点という項目は、）原風景が現在の自分にとって、どのような意味や機能を果たしているかを調べた結果……〈中略〉……自己との関わりを示すものとして結構高い頻度を示すと想定していたのであるが、予想に反した結果となった」と報告し、原風景におけるその低さをいぶかしんでいる。

原風景が「創造力の源泉」となりうるのは、奥野が研究対象とした作家の特殊性とも考えられる。さらに、高校生の場合は、まだ、原風景の持つ意味や機能を十分認識できていないため、「創造力の源泉」と感じられないのかもしれない。原風景に比べ、無意識的な深層のイメージがより表面化しやすい心象風景は、それを見つめること自体が、既に自分にとっての創造である。漠然としているがゆえに、何か湧き出てくるイメージや潜在的な心的エネルギーが、「創造力の源泉」として感じられるのではないだろうか。

〈第2節〉心理臨床の場で「こころの中の風景」が果たす役割

(1) 「こころの中の風景」は、自己吟味の有益な手段となりうる

山下（1975）は、自己の発見に関する論考の中で、「じっと眼をとじて自分自身の心の内を見つめると……〈中略〉……自分自身の内にはとても豊かな1つの世界が広がっているということ、外の世界とは異なる自分だけの世界が広がっていて、そこへは自分以外のだれも近づけないのだ、ということに驚きを覚える」と記している。ここで山下が述べている「自分自身の内に広がる自分だけの豊かな世界」には、「こころの中の風景」や岩田の言う「不思議の場所」と通じるものがあるように思われる。

現代における一般的な高校生の生活感情は、「『燃えない』・『他人ごとのような』・『ど

うってことない』という形容の中に漂っており」(西平, 1990)、自己の探究という問題から一步引いているようにさえ、感じられるときがある。しかし、高校時代も後半に入ると、目前の進路決定を控え、否応なく自己と向き合わざるをえない。自らのアイデンティティ確立や将来への展望など、さまざまな問題が解決をせまってくる。そのときになり、はじめて「自分とは何か」を問いかけ、その答えを出すべく自らと対峙する。

「青年期の中心的課題は、アイデンティティの形成である」(Erikson, 1959/1973)とされているが、「こころの中の風景」と向き合うことは、高校生にとって、「人生においてはじめて自分の過去と取り組む」営み (Bühler, 1967/1969) となる。「こころの中の風景」を通して、自己を見つめることは、青年期の自我発達において、自己に対する洞察を促進する。その結果、自分が、今、置かれている状況を明らかにし、省察的回想を通して自我に目を向けさせ、自己に対する新たな気づきや人間的な発達を促すことができるのではないかと推察される。

(2) 原風景は、心のよりどころとしての役割を果たす

原風景は、主観的に再構成された自伝的記憶の1つと考えられるが、佐藤(2003)は、自伝的記憶の機能として、「出発点」と「アンカー」をあげている。佐藤によれば、出発点とは、ライフコースを選択するきっかけとなったできごとや、自分の信念・態度が自分の中で誕生した瞬間の記憶であり、アンカーは、自分の能力や価値観に疑問を抱いたりしたときに立ち帰る参照点を言う。

ある生徒は、「人は、前に進むことも大事だけど、こんな風に後ろをふり返って思い出にふれてみるのも大切だ…〈中略〉…。今の私があるのは、この大事な思い出のおかげで成長していると思っているからです」と書いている。高校生の場合、このように拙い表現ながらも、原風景は、現在の自分が何らかの心的影響を受ける「アンカー」としての機能を果たしている場合が多い。また、生徒たちは、原風景を想起することで、「とても安心」・「この風景は、世界で一番平和な場所」とも記している。すなわち、原風景は「魂の故郷」(奥野, 1972)であり、心のよりどころとなっているものと考えられる。

しかし、すべての高校生が、原風景を心の中に抱いているわけではない。高校生のおよそ1/3は原風景をまだ形成していないか、あるいは、原風景が心象風景のかげに隠されているものと推察される。「出発点」としての自伝的記憶が形成されていることはごく稀であることから、原風景という観点からすれば、高校生は、原風景形成の途上にあると言えるのではないだろうか。

(3) 「こころの中の風景」の作文は、投影法として有効か

坂本(2003)は、中学生のスクールカウンセリングで、早期回想を、投影法の、いわば「検査」と位置づけ、その有効性を報告している。

Adler が診断と治療に用い、その後、発展してきた早期回想とは、文字通り、「小さなころの思い出」を語ってもらうことである。坂本によると、早期回想は、①ある日あるところでの特定のできごとの思い出であること、②始めと終わりのあるストーリーであること、③ありありと視覚的に思い出せること、④感情をともなっていること、⑤できれば10

歳くらいまでのできごとの思い出であること、といった条件を満たすように配慮するのが望ましく、語られた早期回想の中には、自己・世界・人生の諸問題に対する認知のあり方、生きる方向性、行動の癖、すなわち、個人のライフスタイルが投影されていると言う。

「こころの中の風景」は、主観的に再構成された自伝的記憶の1つ（原風景）にとどまらず、さまざまな意味と情動の付与されたイメージ（心象風景）である。「こころの中の風景」は、「ほとんどこの私自身ともいえるもの」（山岸，1993）かもしれない。その意味においても、「こころの中の風景」と早期回想は、共通点が多いように思われる。

風景とは解釈であり、読み解かれるものである（Corbin, 2001/2002）。このように、風景という言葉にはある種の曖昧さが含まれているが、岩田は、関根（1982）に附したコメントの中で、「日本人は風景という言葉が好きで、この言葉に誘われて自分のこころの内奥をあかしてくれるという利点がある。この点是一种の投影法として…〈中略〉…何者にも換えがたい有利な点である」と述べている。

このように、「こころの中の風景」は、内的世界からのメッセージの1つと考えられる。したがって、「こころの中の風景」を作文に描いてもらうことは、投影法の1つとして、自己吟味の有益な手段となりうるのではないだろうか。また、高校生は、小学校以来の学校教育を通し、作文を書くことに慣れている。したがって、「作文」という方法には、比較的抵抗感なく取り組める生徒が少なくない。

(4) 今後に向けて—個人面接調査に期待されること—

原風景に関する既往の研究では、作文や質問紙、また、文学作品に依拠することが多く、筆者らも、そのやり方を踏襲した。しかし、今後の課題としては、臨床心理学的見地に立ち、従来ほとんどおこなわれてこなかった個人面接調査を実施してみたい。

先述した通り、「こころの中の風景」は、自己吟味の有益な手段となりうることが示唆されている。よって、精神的に健康的な高校生に対してであっても、個人面接をおこない、「こころの中の風景」を語ってもらうことは、本人が感じている当面の問題や不安の解決に、効果があるのではないだろうか。

河野（2003）は、「過去の自分や家族を振り返ること、未来の自分像を思い描くこと、そのためにこれから何をすべきかという近い未来を想定し、現在を見定めること」は、一定の自我機能が保たれている青年期の人々にとって、たいせつであることを強調している。また、宅（2004）も、青年、とりわけ、高校生を対象とする臨床実践では、「成長途上という点を考慮した成長促進的介入が必要」と述べている。面接を通して「語る」という行為は、自己反省と自己理解を可能にする内省的な行為である。語り手は、語ることを通し、「自身の無意識においてすでに半ば書きかけられている個人的な物語」（Greenhalgh & Hurwitz, 1998/2001）を構築することができるのである。

「風景構成法によって捉えることができたクライアントのイメージは、ヴァーバルな情報からの仮説にその人らしさをプラスするとともに、その人を取り巻く背景的なものを視野に入れることになり、よりはっきりとした方向性を与える」（宮木，1998）のと同様、「こころの中の風景」の作文と個人面接を組み合わせることは、①面接開始時に、クライアントの抱えている問題点のイメージを共有できる、②面接の材料となる、③面接評価として役立つ、という意味で、有用であろう。

また、作文は、「こころの中の風景」を文字言語として紙面上に固定する作業であり、それ自体が「自律した客観的存在を獲得」する。一方、個人面接は、「言葉を語る際の所作や口調、語られる際に対話者相互を取り巻く様々な共通の状況によって言語的意味を活性化し、そうしたもろもろの状況を伴って相手に意味を送る」(竹原, 1994) ことである。こうした特徴を持つ作文と個人面接を組み合わせることで、「こころの中の風景」はより豊かな地平を獲得できるのではないかと思われる。

〈第3節〉まとめ

1. 高校生の場合、「こころの中の風景」は、原風景のみをさすのではなく、心象風景を含む。原風景は、主観的に再構成された自伝的記憶の1つであり、Husserlの言う「生活世界 (Lebenswelt)」の風景である。そこには、家族・学校・地域における親密な人間関係が反映されている。また、心象風景は、時空を超えた超現実の感覚的・詩的な世界のイメージであり、核になる原体験を内に持たない。そこには、現在、自分が抱えている不安や迷いなどが、無意識的に反映されている。
2. 高校生が、「こころの中の風景」を通して自己を見つめることは、自分が、今、置かれている状況を明らかにし、省察的回想を通して自我に目を向けさせ、自己に対する新たな気づきや人間的な成長を促すことができるのではないかと推察される。
3. 原風景は、自分の能力や価値観に疑問を抱いたりしたときに立ち帰る心のよりどころとなっている。しかし、すべての高校生が、原風景を心に抱いているわけではない。高校生は、原風景形成の途上にあると言えるのではないだろうか。
4. 「こころの中の風景」は、内的世界からのメッセージの1つと考えられる。したがって、高校生に「こころの中の風景」を作文として描いてもらうことは、投影法の1つとして、自己吟味の有益な手段となりうるのではないかと思われる。
5. 「こころの中の風景」の作文と個人面接を組み合わせれば、自己反省と自己理解を可能にする内省的な行為を支え、高校生の心理的な発達を援助することができるのではないかと考えられる。

付記：本研究は、2005年春に徳島大学大学院人間・自然環境研究科（臨床心理学専攻）に提出した修士論文の前半部分を、加筆・訂正したものである。調査に御協力くださったD高等学校・E高等学校の関係者と生徒の皆様に、心から感謝申し上げたい。

【引用文献】

- Bird, I. L. 1880 *Unbeaten Tracks in Japan. An Account of Trabels in the Interior, Including Visits to the Aborigines of Yezo, and the Shrines of Nikko and Ise.* 2 Vols. [バード, I. 高梨健吉 (訳) 1973 日本奥地紀行 平凡社]
- Bühler, C. 1967 *Das Seelenleben des Jugendlichen. 6. erweiterte Aufgave.* Stuttgart ; Gustav Fischer [ビューラー, C. 原田茂 (訳) 1969 青年の精神生活 協同出版社]
- Buttimer, A. 1976 *Grasping the Dynamism of Lifeworld, Annals of the Association of American Geographers, 277-292*
- Corbin, A. 2001 *L'Homme dans le paysage. Textuel* [コルバン, A. 小倉孝誠 (訳) 2002 風景と人間 藤原書店]
- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the Life Cycle.* New York ; International Universities Press [エリクソン, E. H. 小此木啓吾 (訳編) 1973 自我同一性 - アイデンティティとライフ・サイクル - 誠信書房]
- Greenhalgh, T. & Hurwitz, B. (Eds.) 1998 *Narrative Based Medicine: Dialogue and Discourse in Practice.* London ; BMJ Books [グリーンハル, T. & ハーウィッツ, B. (編) 斎藤清二・山本和利・岸本寛史 (監訳) 2001 ナラティブ・ベイスト・メディスン - 臨床における物語と対話 - 金剛出版]
- 星野命・長谷川浩一 1985 青年の「心の風土」としての原風景 九学会連合・日本の風土調査委員会 (編) 日本の風土 弘文堂 119-154
- 井上佳朗 1995 原風景の心理学的研究 鹿児島大学法文学部紀要・人文学科論集41 27-68
- 岩田慶治 1976 コスモスの思想 - 自然・アニミズム・密教空間 - 日本放送出版協会
- 岩田慶治 1977 日本文化の深層 - 全体像のためのフォークロア - 諸君9 (11) 158-162
- 岩田慶治 1979 カミの人類学 - 不思議の場所をめぐって - 講談社
- 岩田慶治 1982 原風景の構図 季刊人類学13(1) 125-131
- 岩田慶治 1985 原風景の構図 岩田慶治 (編著) 子ども文化の原像 - 文化人類学的視点から - 日本放送出版協会 23-36
- 岩田慶治 1992 日本人の原風景 - 自分だけがもっている一枚の風景画 - 淡交社
- 河野荘子 2003 青年期事例における時間的展望の現れ方とその変化 - 不登校を主訴として来談した2事例をもとに - 心理臨床学研究21(4) 374-385
- 久世敏雄 2000 青年期とは 久世敏雄・齋藤耕二 (監修) 青年心理学事典 福村出版 4-5
- Marx, W. 1987 *Die Phänomenologie Edmund Husserls: Eine Einführung.* München ; Wilhelm Fink Verlag [マルクス, W. 佐藤真理人・田口茂 (訳) 1994 フッサール現象学入門 文化書房博文社]
- 宮木ゆり子 1998 内的世界からのメッセージについて - 風景構成法を通して - 心理臨床学研究16 (5) 429-440
- 西平直喜 1990 成人になること - 生育史心理学から 東京大学出版会
- 西村洲衛男 1992 高校時代の問題 安香宏・小川捷之・空井健三 (編) 臨床心理学大系第10巻『適応障害の心理臨床』 金子書房 47-62
- 呉宣児 (OH, Seon-Ah) 2000 語りから見る原風景 : 語りの種類と語りタイプ 発達心理学

研究11 (2) 132-145

- 呉宣児 (OH, Seon-Ah) 2001 語りからみる原風景 —心理学からのアプローチ— 萌文社
奥野健男 1972 文学における原風景 集英社
坂本玲子 2003 「早期回想」使用における認知療法的アプローチ —スクールカウンセリングでの使用例を通して— 井上一臣編 認知療法 ケースブックくこころの臨床 à・la・carte 22 増刊号(2) > 星和書店 143-150
佐藤浩一 2003 自伝的記憶の機能 2003.9.13.日本心理学会第67回大会ワークショップ12 「自伝的記憶研究の理論と方法 —研究の現場から—」 2-4
関根康正 1982 原風景試論 —原風景と生活空間の創造に関する一考察— 季刊人類学13(1) 164-191
千田稔 (訳編) 1981 地図のかなたに —論集 景観の思想— 地人書房
Spranger, E. 1924 Die Psychologie des Jugendalters. Heidelberg Quelle & Meyer Verlag [シュプランガー, E. 土井竹治 (訳) 1973 青年の心理 五月書房]
高橋義孝 1978 原光景と原風景 思想653 27-35
竹原弘 1994 意味の現象学 —フッサールからメルロ=ポンティまで— ミネルヴァ書房
宅香奈子 2004 高校生における「ストレス体験と自己成長感をつなぐ循環モデル」の構築—自我の発達プロセスのさらなる理解に向けて— 心理臨床学研究22(2) 181-186
寺本潔 1985 自叙伝からみた大岡昇平の地理的原風景 地理学報告(愛知学芸大学地理学会) 61 57-64
寺本潔 1986 大学生の回顧文に見る地理的原風景の構造 地理学報告(愛知学芸大学地理学会) 62 36-43
寺本潔 1988 子ども世界の地図 —秘密基地・子ども道・お化け屋敷の織りなす空間— 黎明書房
寺本潔 1990 子ども世界の原風景 —こわい空間・楽しい空間・わくわくする空間— 黎明書房
東京農業大学農学部造園学科造園用語辞典編集委員会 (編) 1985 造園用語辞典 彰国社
山岸健 1993 風景とは何か —都市・人間・日常的世界— 日本放送出版協会
山岸美穂・山岸健 1999 音の風景とは何か —サウンドスケープの社会誌— 日本放送出版協会
山下栄一 1975 青年期の自分(自己)の発達 井上健治・柏木恵子・古沢頼雄 (編) 青年心理学 —現代に生きる青年像— 有斐閣 106-119

(2005年10月7日 受理)